

日本ジャーナリスト連盟の 結成と新聞単一（上）

——増山太助氏*に聞く



- | | |
|------------------|--------------------|
| はじめに | 3 日本ジャーナリスト連盟の結成 |
| 1 資料の収集と研究の意義 | 4 日本ジャーナリスト連盟と新聞単一 |
| 2 読売入社と敗戦（以上、本号） | 5 日本ジャーナリスト連盟の活動 |

はじめに

敗戦翌年の1946（昭和21）年1月30日、聴濤克巳（「朝日」）、鈴木東民（「読売報知」）、阿部真之助（「毎日」）らを発起人として、新聞、通信、放送、出版各分野のジャーナリストが集う日本ジャーナリスト連盟が結成された。

日本ジャーナリスト連盟は、会員自身、戦時期における自らの戦争責任を強く自覚して結成され、綱領に「民主主義的ジャーナリズムの確立」「反動的ジャーナリズムに対する闘争」など5項目を掲げ、戦後改革期のジャーナリスト運動をリードした。このジャーナリスト連盟は1949年秋、朝鮮戦争を前にした言論・出版界に対する規制のなかで活動停止に追い込まれるが、最盛時には700名余の会員を擁し、京都、岡山、広島などにも支部が結成された（日本民主主義文化連盟編『文化年鑑』1949年版）。

*増山太助氏略歴

1913（大正2年）年8月20日、東京・日本橋に生れた。開成中学、成城高等学校をへて1935（昭和10）年4月京都帝大経済学部に入學した。在学中、新村猛・中井正一らの『世界文化』の発行に呼応し、反ファッショ・人民戦線運動の一環として『学生評論』（1936年5月）を創刊した。1938年9月「日本共産主義者団」の事件に連座して検挙されたが、不起訴で釈放され、1939年3月大学を卒業した。

1939年4月読売新聞社に入社し経済部の記者となった。入社早々、小作統制令の原案（1939年12月6日公布）をスクープして注目された。翌40年1月召集され、野戦重砲連隊（千葉県市川市）をへて、臨時東京第三陸軍病院（神奈川県相模原市）に主計として赴任、1945年8月15日の終戦を任地で迎えた。

1945年9月1日付で復社した。同年10月、経営幹部の戦争責任追及や社内民主化を掲げて始まった第1次読売争議では闘争委員、従業員組合書記長として第一線に立ち勝利に導いた。また1946年6月12日からの第2次争議では敗退したが、争議団代表として会社側と交渉にあたった。この第2次争議中は、読売労組の常任執行委員、新聞単一の副執行委員長・組織部長を務めた。またこれらに先立って長島又男、美作太郎、小林一之らを補佐してジャーナリスト連盟の設立を準備した。この間、日本共産党に入党した。

近年、占領期の日本ジャーナリズム研究は、山本武利著『占領期メディア分析』（法政大学出版局、1996年）、山本輝雄著『戦後史のなかの憲法とジャーナリズム』（柏書房、1998年）などが出版され、進展をみている。ジャーナリスト連盟は、戦後日本において結成をみたジャーナリストにおける最初の職能団体で、現在の日本ジャーナリスト会議（JCJ）の前身をなすものである。

このジャーナリスト連盟の結成と活動については、松田博・岩切信執筆『ジャーナリスト運動の軌跡——日本ジャーナリスト会議の40年（上）』（日本ジャーナリスト会議、1997年）においてJCJの前身として言及されているが、結成の経緯や活動については掘り下げられていない。また連盟と新聞単一（日本新聞通信放送労働組合）の関係についても言及されてない。

証言者の増山太助氏は、読売争議（第1次）に勝利した読売従組の書記長として、また「読売報知」の記者を代表する形でジャーナリスト連盟の結成を準備し、新聞単一の副執行委員長においても連盟と新聞単一の連絡・折衝の窓口を担っておられた。

増山太助氏からのヒアリングは2003年8月9日と9月11日の2回、静岡県熱海市伊豆山1130番地ライフケア伊豆山5205号の自宅で、吉田健二がおこなった。本稿はこの2回の証言を中心に、1998年2月26日「日本民主主義文化連盟と日本ジャーナリスト連盟」のテーマで実施した証言と合わせて編集したものである。なお本証言は第1回掲載分のみ、増山氏自身、生前において加筆・補正を試みたものである。

本証言は2003年中に、遅れても2004年の早い時期に本誌において発表する予定となっていた。だが当研究所は2003年4月以来、創立85周年を記念する特別事業として『日本労働運動資料集成』（旬報社、全13巻・別巻1）の編さんに着手し、筆者も編集委員として作業に追われる日々となった。研究所の特別事業は2007年5月に完結をみている。この間、増山氏は自らの証言の発表を望みつつ、2007年5月27日に死去された。ここにこの間の経緯を記して、増山太助氏にまげてお詫び申し上げ、あわせて衷心より冥福をお祈り申し上げたい。

（吉田健二）

1946年10月、第2次争議の調停が成り読売新聞社を退社した。1947年1月日本民主主義文化連盟の常任理事（組織・出版局長）に就任、機関誌『文化革命』『働く婦人』の編集委員や発行名義人となった。1947年12月共産党の全国オルグとして関西地方委員会に派遣され、翌48年4月より本部勤務となり文化部員、つづいて選挙対策部・選挙動員本部長として1949年1月の総選挙闘争を指揮した。のち書記局事務に異動して婦人部、青年・学生対策を担当し、50年6月の党分裂以降は関東地方委員会委員や東京都委員長を務めた。

1955年7月の六全協以降、中央委員候補や本部細胞の責任者となった。1958年7月の第7回大会を機にいったいの役職を辞退し、一党員として居住細胞に属した。1979年5月に規律違反の名目で除名となった。

この間、1958年12月『健康会議』の編集長、1959年10月村上色彩技術研究所の室長、1972年スター印刷企画代表取締役、1975年雑誌『一同』編集・発行人となり、1977年からは雑誌『新地平』の代表取締役・主幹などを歴任した。

1983年以降、熱海市伊豆山のライフケア・マンションに移転して執筆活動に専念した。2007年5月27日、社会福祉法人湖成会「熱海伊豆海の郷」（熱海市）で死去した。享年93歳だった。2007年10月6日、有志により「増山太助さんを偲ぶ会」（東京・総評会館）が開催された。著書に『読売争議1945/1946』（亜紀書房、1976年）、『産別会議十月闘争——新聞放送ゼネストをめぐる』（五月社、1978年）、『検証・占領期の労働運動』（れんが書房、1993年）、『戦後期左翼人士群像』（つげ書房新社、2000年）などがある。

1 資料の収集と研究の意義

ジャーナリスト連盟の資料

増山 暑いなか伊豆山（静岡県熱海市）までご足労願って恐縮です。ここは頂上すぐ近くだから夏でも風があって快適なのです。だが今日はむしろ暑い。台風一過で風も生暖かい。

——増山さんとは5年ぶりです。お元気で安心しました。

増山 いや、そうでもない。頭はまだボケていないと思うが、足腰が極端に弱くなりました。私は当年90歳です。去年の春までは用事があると新幹線を利用して一人で東京へ出かけておりました。けれども駅の階段の昇り降りや、杖があっても歩行がとても難儀で、東京へ出て途中で万が一のことがあると人様に迷惑をかけてしまうので昨年からは遠出を止めています。

この間、あなたが送ってくれた資料（コピー）に目を通して記憶を整理しておりました。ジャーナリスト連盟の結成は1946年1月のことです。設立準備は1945年11月、読売争議（第1次）の勝利を得て進められ、最初の準備会は小野俊一さんが設立した民衆新聞社（麹町区富士見町2丁目9番地）で開きました。小野さんは創立大会では議長をつとめました。戦後も60年近く経つ……。

——そうですね。

増山 資料を読みメモをとっているうちに当時の記憶がだんだん蘇ってきました。

読売争議をともに闘い先に鬼籍に入った吹田秀三、小林雄一、京都帝大の先輩の坂野善郎さんらの同志や、ジャーナリスト連盟の事務局長として運動を支えた小林英一郎さん、さらに新聞単一の結成をともに進めた小林一之さんらの顔が浮かんでとても切なくなりました。

先に報告をしておきます。私は30何年前に

読売争議に関する論文を発表しました（『労働運動史研究』第53号、55・56号、1970年12月、1973年9月、労働旬報社）。それから少し経って、東大社研の山本潔さんが『読売争議1945・46』（御茶の水書房）を出すというので取材を受けました。そのときに集めて整理した「読売争議関係ファイル」に連盟の設立に関する資料が綴じ込まれていました。この資料（「日本ジャーナリスト聯盟結成趣旨」1946年1月）や、創立大会において鈴木東民さんが絶叫調で説明した「一般運動方針」（1946年1月30日）なども綴じられています。

——この資料（「日本ジャーナリスト聯盟結成の経過」）とあわせて、お借りしたいのですが。

増山 私のほうでコピーして送らしましょう。ほかにも押入れを探せば出てくるかもしれない。

1945年12月28日、読売新聞社でジャーナリスト連盟の結成に向けた正式な発起人がもたれました。これを実務的に準備したのが私や、民報社の長島又男、新聞単一の結成の実務を担っていた小林一之（神戸新聞社）、それに出版界を代表して美作太郎（日本評論社）、佐和慶太郎（人民社）、小林英三郎（高山書店）の各氏が集まって準備しました。通信界を代表して「共同」と「時事」からも各一人出ていましたが、顔は浮かぶが名前が出てこない。

——「時事」からは安達鶴太郎さんでは？

増山 いや、ちがいますね。安達さんは当時、同盟通信社が分割して「共同」と「時事」になり、時事通信社のほうに異動して取締役か、編集局の幹部となっていました。「時事」と「共同」から出ていた実務作業を担う準備委員についてはそのうち思い出すでしょう。

まだ探していないが、機関紙『ジャーナリスト月報』（タブロイド判）や、準備委員だった

長島さんや小林英三郎さんからの手紙がわが家に残っているはずですよ。出てきましたら一緒にコピーして送るようにします。

証言者の相次ぐ死去

増山 ジャーナリスト連盟については、私自身、語って記録として残しておきたいと思っておりました。当時の関係者がみな鬼籍に入られた。設立の準備委員で、創立以来、事務局長の任にあった小林英三郎さんは6、7年前に亡くなりました。

小林英三郎さんは戦時中、改造社の編集部で勤めていたときに横浜事件で検挙され、戦争が終わって釈放となった方でした。私が美作太郎さんに紹介されて彼に会ったときは、1945年11月の時点ですが、高山書店という出版社の編集長の肩書で、『言論』という雑誌を編集していました。

小林さんは亡くなるまで、横浜事件の再審請求の闘争で頑張っておりました。小林さんは人間として実に謙虚で、誠実な方でした。1979年5月に私は日本共産党を除名され、以来音信がなくなりましたが、私が1946年10月、第2次読売争議に敗れて読売を去ってからも、文連（日本民主主義文化連盟）の活動で連絡を取り合っていました。

美作太郎さんは早くに亡くなりました。長島又男さんからは、ジャーナリスト連盟に関しては話を聞いていないということですね。

——ええ。研究所は1991年に「戦後社会運動資料」のシリーズとして『民報 東京民報』（全7巻・別巻1、法政大学出版局）を復刻しました。僕はその復刻版の解題を執筆するため、港区白金台の「般若苑」の近くのご自宅を訪ね、出入り自由の取材をさせてもらいました。

けれども僕は当時、「占領期の左翼メディア

ア」を研究テーマとしながらも、日本ジャーナリスト連盟までは研究関心が及んでおりませんでした。絶好のチャンスを逃してしまったと悔やんでいます。

顧みて、もう一つ残念なことがあります。長島さんが亡くなられて、何か月かして長島家から連絡があり、奥様から「民報の研究に役立つならどうぞ」と言われて備忘録やノート類を見せてもらった経過がありました。けれどもノート類には他の個人情報なども書き込まれていて寄贈を受けるのを躊躇し、民報社に関する写真や機関紙連合通信社の社長時代の写真などをもらってきました。

増山 長島さんは問題の本質を瞬時に理解できる人でしたね。話の筋も理路整然と立てられて無駄がない。またとても几帳面な人でした。彼は連盟では当初、代表幹事のような任にあり、JCJの設立の世話人でもありましたから生前に聞いておくべきでしたね。

——残念でなりません。あのノート類も「占領期の左翼メディア」を分析するさいは情報の宝庫だったろうと思われ、寄贈を受けなかったことが悔やまれます。

増山 私は読売では小林雄一、吹田秀三、他社ではもっぱら民報社の長島又男さんや、出版関係では主に美作太郎さんと連絡をとりながらジャーナリスト連盟の設立を準備しました。

ほかに連盟について語るとすれば、新聞単一の放送支部から出ている柳澤恭雄さんくらいでしょう。柳澤さんは当時、NHKで報道部の副部長という要職にありましたが、「放送の民主化」を唱えておられました。柳澤さんは最近まで日本電波ニュース社の社長でした。彼は私より歳が3つ4つ上ですから、果して健在かどうか。

私はジャーナリスト連盟に存続の全期間タッチしていたわけではない。日本共産党のオルグ

として大阪に半年近く駐在した時期もあり、共産党の文化部長や文連の常任委員を兼ねていましたから、1948年以降の活動についてはよくわからない。私が裏付けをもって話ができるのは、ジャーナリスト連盟の結成経緯や新聞単一の副委員長として関与した1947年までの時期です。この点ご了解願いたい。

近年の日本ジャーナリズム

——近年はネット新聞の発行などメディアの形態が多様化して、一見、ジャーナリズムが発展しているかの観があります。けれどもその実態に一步踏み込むと、僕自身はむしろ日本ジャーナリズムが危機を深めているのではないかと思っています。確かにメディアが多様化し、活発な言論が展開されていますが、ジャーナリズムの本来の機能が、報道機能であれ評論・指導機能であれ著しく低下ないし弱体化しているのではないかと思っております。

増山 名前をあげませんが、私にときどき電話をかけてくる大手紙の政治記者もそう言うておりますね。

——先日、中馬清福『新聞は生き残れるか』（岩波新書、2003年4月）、小林雅一『隠すマスコミ・騙されるマスコミ』（文春新書、2003年5月）を読みました。マスコミ産業としての危機も指摘されていましたが、ジャーナリズムとしての危機が論じられていました。他方で情報の独占や系列の強化、あるいはメディア自体、政権との癒着や接近なども見られ、「真実の報道」「客観報道」といつてもどこまでが事実であり、真実なのかわからない。

増山 そう。

——ジャーナリズムの機能が弱体化していることの背景に、ジャーナリストがもつ固有の職能的な権利意識や性格が薄れ、あるいは

各企業において職能教育がきちんとなされていない問題や、ジャーナリスト自身、経営や企業秩序に縛られてその自主・自立性が確保されていない、という問題があるのではないのでしょうか。

ジャーナリスト連盟は戦後日本の起点において結成された最初の職能組織でした。連盟は活動において必ずしも職能的な課題に取り組んでいなかったようですが、編集権の確立闘争や、ジャーナリズム講座の開設など技術や教育訓練にも取り組んでいました。

日本で最初のジャーナリスト職能団体としては東京記者連盟（1927年2月結成）があげられます。最近、東京記者連盟の機関誌が復刻され、活動の一端が明らかになりました。ジャーナリスト連盟はこれに次ぎます。僕は、このジャーナリスト連盟の分析のなかに、ジャーナリズム機能の弱体化を克服する条件があるのではないかと思っています。

増山 職能組織の結成は、ジャーナリズムの機能を強化する重要な要素となっているだけでなく、日本ジャーナリズムを民主化するためにも基本的に重要な問題であると思う。

ジャーナリストには職能的な固有性があります。これらの条件や権利を待遇問題と合わせて守ることは、根っこで日本ジャーナリズムを民主化するという課題とつながっていると思いますね。ジャーナリズムの機能を強化するための方策は多々あると思いますが、企業内部における自己改革や、ジャーナリスト自身、企業を超えて職能結集を図ることが不可欠だと思いますね。

2 読売入社と敗戦

読売入社

——増山さんは、第1次読売争議（1945年

10月23日～12月11日）で闘争委員として活躍され、争議中に結成された従業員組合でも書記長をなさいました。満州事変以降、抑圧されて「暗い谷間」にあった日本労働運動は、實際上、読売争議をきっかけに復活します。増山さんは当時、委員長の鈴木東民さんと並ぶ読売争議の「顔」となっておりました。増山さんはどのような思いで読売に入社されたのですか。

増山 理由は単純なことです。読売しか受験できなかった。私は1939（昭和14）年3月に京都帝大の経済学部を卒業しました。けれども前年9月に春日次庄郎らの「日本共産主義者団」の事件に連座して検挙され、私は数か月間勾留され、結局不起訴となりました。

卒業に必要な単位は語学系の専門科目2科目だけ残っていました。卒業それ自体は心配なかったのですが、勾留が長引いて現在でいう就職活動はできなかった。「大朝」や「大毎」の入社試験はとっくに終わっていた。

——当初から新聞記者を志望されていたのですね。

増山 そうです。大学時代、私は『京都帝国大学新聞』の編集部員でした。それで私は、就職するなら先輩がいる「大毎」（大阪毎日新聞社）へ行こうと思っていた。「大毎」は大阪の財界人が創刊した新聞社で、大阪が実質の本社となっていました。

私は大学の学生課を訪ねて、長崎太郎という課長に会って相談しました。課長は分厚い「求人綴」を調べて、全国紙では「読売」だけが残っていることを教えてくれました。ラッキーだったことに読売の場合、私が大学を卒業する年から新卒公募制を採用し、採用試験にも間に合う日程だったのです。

長崎さんは実に親切でしたね。課長は、京大出身で読売の幹部となっている野口務さんと坂

野善郎さん宛に紹介状を書いてくれました。野口さんは当時、読売巨人軍の球団代表でした。坂野さんは部長で、のち第1次読売争議に勝利した鈴木東民が編集局長になったときの局次長（政経部長を兼任）となり、読売では安田庄司さんと並ぶ逸材と言われていました。私は早速、紹介状をもって東京へ直行し二人に会いました。

紹介状が入社の決め手になったという事実はないのです。二人から同じように「試験を受けて受かるほかないね。君は京都ではまじめに勉強していたのかい」とつっけんどんに言われました。「試験に頑張れ」とも言われなかった。実際、私が京都でまじめに勉強していたかはあやしい（笑）。

——「紹介状」の効果は無かったのですね。

増山 無かったと思う。けれども気になったというか「大学の後輩で、左翼に首を突っ込んだ学生」という、ある種の親和性をもって目に留まったことは確かでしょう。

実は野口さんは自身、京都帝大に在学中の1929年に文部省の圧力で社研が解散を余儀なくされたときの中心メンバーでした。坂野さんも第八高等学校—京都帝大において社研で活動していたのです。二人ともかつては左翼学生で、京都帝大の先輩というより、むしろ京大社研の先輩だったのです。

読売の採用試験は四谷の上智大でおこなわれ、受験者も大講堂を埋めるほどでした。試験は時事・教養問題に関する論述で、私自身、手が出ないというような問題ではなかった。私はこの論述試験に合格し、また重役や正力社長との面接もうまくいって正式に採用と決まりました。うれしかったですね。

第1回の公募採用試験の合格者は11名でした。合格者に武藤三徳や、第2次争議でも一緒

にたまたま子安泰君などがいますが、帝大の出身者は私だけでした。帝大出の記者は正力さんの方針で優遇され、給与は他の記者と比べて少し高かった。

小作料統制令をスクープ

増山 私は経済部に配属となりました。読売は太平洋戦争中の1942年7月に「報知」と合併して「読売報知」となり、同時に機構改革も実施し、経済部は政治部と合併して政経部となっています。

これ以前、私が入社したときの経済部長は安田庄司さんで、次長はその年の秋にニューヨーク支局長としてアメリカに赴任する小林雄一さんでした。私は二人から取材の仕方や記事の書き方のイロハを教えてもらい、安田さんの側近くに机を置いて経済部の「遊軍」として記者の第一歩を踏みました。

私が入社する前年、1938（昭和13）年4月に国家総動員法が施行され、同月、戦時統制の一環として農地調整法が公布されています。農地調整法は小作農の権利保護や、戦争の長期化が予想されるなかで戦争体制構築の一環として農業生産力の増強をめざしたものでした。

私は大学で農業経済や農政を専攻しています。卒論も「外蒙古における農地改革」というテーマでした。農地調整法を実効あるものにするためには小作料統制令の公布にまで踏み込むことが予想され、実際、私が入社した春から農林省のもとで法案作成が始まっていました。

小作料統制令は実際に1939年12月6日に公布されましたが、この小作料統制令は当時、焦点となっていたテーマで、ニュース価値としても大きかったです。

——どのような意味で？

増山 地主制の改革につながる要素がありました。小作料の統制は小作農にとって小作料の

凍結や引き下げが期待され、凍結ないし統制されたもとで農地調整令と相俟って耕作権が保護されます。

他方、地主にとっては農地の所有や売却が制限され、小作料収入の減少という問題として受け取られます。また、この問題は当面の利害関係でも小作料の額や設定する基準日などが重大な関心事となっていたのです。

私はこの小作料統制令の原案をスクープし、解説記事を付けて発表したのです。私の最初のお手柄でした。

本来、農政に関するスクープ記事は、農林省や官邸詰め記者など記者クラブのメンバーが有利です。権力の中核や情報ソースのすぐ近くにありますからね。ところがベテラン記者を差し置いて、入社したばかりの私がこれをスクープしたので、社内でも話題になり、部長の安田さんが大変喜んでくれました。

安田庄司について

増山 私はどういうわけか安田庄司さんに大変可愛がってもらいました。安田さんは読売の実力者の一人で、敗戦時は高橋雄毅主筆のもとで副主筆をされ、読売争議が終わったのちに副社長や論説主幹となっています。私は安田さんからよく「お前は読売を背負う気概があるのか」とか、「読売を日本一の新聞にしたいものだ」という話を聞いておりました。

——「日本一の新聞」とは発行部数のことでしょうか。

増山 そうです。読売は「報知」と合併する前、私が入社した時点ではまだ100万部に届いていない。ところが読売は太平洋戦争中、戦争報道記事が受けて、また「報知」との合併もあって購読者を増やし、敗戦時において東京本社だけで120万部くらいになっていたと思います。発行部数は「朝日」「毎日」を抜いて、東京紙

のなかでは筆頭となっていました。

120万という部数は、戦争中、製紙工場が休業・閉鎖となって洋紙生産が低下し、新聞の整理統合や大手紙を含めて用紙割当てが削減されたもとはすごい数字なのです。当時は戸配でなく共販制でした。新聞販売店では読売が一番目立つ棚に積まれ、また一番早く売り切れていましたね。

安田さんから言われたことで、現在も記憶に残っているのは「酒を飲む記者は大成する」ということです。

——一般化はできないと思いますが。

増山 当然です。真意は別のところにありました。とにかく安田さんは酒が好きだった。私は本社に常駐する「遊軍」だったので、安田さんから「今日は築地のあそこに行こう」とよく誘われました。酒を通じた付き合いは、私が1940年1月に召集され、相模原市の臨時東京第三陸軍病院へ主計として赴任して以降、敗戦までつづきました。

私は仕事上、陸軍省との連絡でよく東京に出張し、そのたびに本社に立ち寄っていました。安田さんは、社でぶらついている私を見つけると「増山、日の丸の陸軍病院じゃないか、酒くらいはあるだろう。酒を持ってこい」と命令して（笑）、毎回じゃないけれども調達して持参しておりました。

安田さんは、決して処世術や社交術の一つとして酒を飲めとか、酒を飲めば出世・昇進が早いと言っているのではなかったのです。「人生を楽しめ」「裸の付き合いをしろ」「相手の懐に入れ」というようなニュアンスだったと理解しています。

安田さん自身、大酒飲みでしたね。短気な面があり、社内でも部を越えてよく喧嘩していて「ケンカ安」とあだ名されていました。けれども喧嘩した相手に対しては必ずフォローし「ま、

酒を飲もう」と誘っていましたね。

安田庄司さんがなぜ私を可愛がったのか、生前に聞いておくべきでした。読売争議が終わって何年かして、馬場恒吾社長からも安田さんからも「増山、戻って来てもいいんだよ」と電話がかかってきたことがありました。けれども私は争議団の代表をしていましたからね、戻るといふわけにはいかなかった……。

渡辺恒雄の入社を推薦

増山 安田さんに関連して、このことも紹介しておきます。朝鮮戦争の年1950年と記憶するが、安田さんから突然電話がありました。安田さんは「増山、ナベツネ（渡辺恒雄）は優秀だと思うが、一体どういう人間なのだ」と言って、「ナベツネが読売の入社試験を受けて論文や面接で合格点となっているが、実際に採用するかどうか思案中なんだ。お前の意見を聞かせてほしい」ということでした。

——どうして増山さんに？

増山 私は当時、日本共産党の青年・学生対策の責任者でした。ナベツネは東大の有力な学生党员だった。彼は有能で、バイタリティもありました。リーダーとしての資質も十分にありましたね。

私は共産党の東京都委員長に就任するまで東大細胞の彼とはかなり接触もっていました。安田さんは、ナベツネが共産党员であることを事前に調査して、そのことを承知の上で採用を検討し、また私が共産党の青年・学生対策の責任者で、彼とは密に接触していることをこれも承知の上で問い合わせてきたのです。読売の人事調査の能力はすごいですよ。

——増山さんは、どう返事なされたのですか。

増山 これも記憶しています。私は「人格として何ら問題ないと思う。彼は優秀だから、採

用しても問題はないと思う。採用するならむしろ政治部で使ったら活躍すると思いますね」と答えました。実際、ナベツネは優秀でしたね。話をすればきちんと筋が通っていて、指導においても呑み込みが実に早かった。

実は安田さんからの電話と前後して、ナベツネ本人からも電話がありました。たぶんナベツネからの電話のほうが早かったと思う。私はナベツネに会いました。私は彼から「読売にぜひ入社したい。ぜひよろしくお願ひしたい」と頼まれました。

私自身、ナベツネに会ったさい「君は読売争議についてどう思う？ 読売争議がめざした新聞民主化の理念や、新聞労働者の生きるための叫びについて、君自身きちんと踏まえる必要があると思うが、どうなのだい」と尋ねました。彼は「わかっています。争議は残念な結果になりましたが、成果も限界もきちんと学んで仕事に生かします」と真摯に答えたのです。私は「ぜひ争議の成果を生かしてくれないか」と頼んで別れました。

私はナベツネに関しては、他の人より良識があると思ひ、読売における記者活動について期待しました。実際、彼はきちんと学問を修めていたようだし、全体状況のなかで組織を動かす才能や器量も抜群にありました。私は、彼のような有能な記者が入社して読売が正常に再建されることを期待したのです。

ナベツネは入社して変わったんですよ。私は正直言って、あのような形で読売が再建されるとは思わなかった。だから、私はナベツネの入社に賛成したことについて責任がありますね（笑）。彼は東大時代にはとても純粋だったので。私は彼のその純粋さや社会正義感にも期待したのですが。

読売——経営は警視庁人脈で固める

増山 戦争中の読売で特徴的なことの一つに、経営において正力松太郎の独裁が顕著だったことのほか、幹部を警察官僚出身者で固めていたことがあげられます。

正力自身、もとは警視庁の刑務部長や官房主事という要職にありました。腹心の品川主計（しながわ・かずえ）も警視庁警視一官房主事をつとめ、岡喜七郎は警視總監、さっき名前が上がった高橋雄豺は内務省警保局の警務課長で、小林光政は警視庁特高課長、木下謙次郎も経歴はよく知らないが警察官僚でした。

読売は敗戦まで総務や業務・販売の部門を「警視庁人脈」でがっちり固めていました。新聞社の「顔」となる主筆も敗戦時は高橋雄豺でした。正力や幹部は国家の権力中枢、なかでも内務省警保局と直結していたのです。だから読売は他社よりニュースソースに有利に接近し、あるいは記者クラブの連中より情報を早く入手することができました。また「警視庁人脈」が利いていたせいか、読売は敗戦まで争議など起きていない。

読売——編集はかつての左翼が掌握

増山 もう一つ、戦争中の読売で顕著なのは「警視庁人脈」が存在する一方で、編集局にかつて大学や高等学校において学生運動や左翼運動に関係した幹部や記者がかなり在籍していたことです。編集局は事実上、かつての左翼が牛耳っていました。

——増山さんご自身、左翼だったわけですね。

増山 そう。私は成城高等学校—京都帝大を社研の活動で過ごした。高等学校のときに「成城学園騒動」が起って、私は小原国芳主事の首切り反対・自由主義教育の擁護で旗を振っていました。それで私は河上肇先生の話を知ったか

ったし、大学の自治と自由主義教育を標榜する京都帝大に進んだのです。また河上先生が京都帝大社研の顧問の存在でした。

大学時代は、新村猛・中井正一さんらが京都で『世界文化』を発行して反ファッショ・人民戦線の文化運動をおこなっていました。私らはこの運動に刺激されて『学生評論』（1936年5月）という雑誌を発行したのです。また私は1937年5月26日に学生メーデー（学生祭）を主宰しています。ほかに留年で済むのか、退学までいくのか心配しましたがけれども、私は翌38年9月13日に春日庄次郎らの「日本共産主義者団」の事件に連座して検挙されてもいます。

読売は、私がこれらの左翼運動にタッチしていた経歴を百も承知で採用したのです。正力さん自身私に「増山、よくウチに来てくれたね」（笑）なんて言ったのですよ。これは読売に思惑があつてのことだと思ふが、ある意味では読売の見識として評価してもよいと思う。

——「思惑」とは？

増山 読売は当時、「軟派の新聞」とか「右よりの新聞」という評判がたっていました。会社はそういう評判を払拭して、実力のある学生は左翼であろうと関係なく採用するという懐の深さを示す、という思惑もあつたと思うね。

けれどもこの点が重要なのですが、読売にあつては実際にイデオロギーや過去の経歴で記者や工員を差別する、排除するという雰囲気はなかった。賃金は確かに他社にくらべて低く抑えられていたけれども、過去を問うようなことは一切なかった。

——正力社長に対しては徹底した反共主義者、という印象があります。正力社長は警視庁官房主事のときの1923（大正12）年に、日本共産党に対する一斉検挙を指揮して堺利彦、市川正一、徳田球一らの幹部を検挙し、指導部を崩壊に追いやっていますね。

増山 そうです。読売争議（第1次）のさいも「共産党が指導しているから」と言って絶対に身を引かなかつた。共産党は実際に指導していないが、正力さんにとって「反共」が執念であり、思考と行動の原理となっていることは間違いない。けれども事、経営となるとまた別の論理が働くのですね。

——編集局に巢食う（笑）かつての左翼といえますと、たとえばどのような方があげられますか。

増山 名前をメモしておけばよかったですね。東京帝大新人会のメンバーだった人に鈴木東民、片山睿、吹田秀三さんなどがおりました。吹田秀三さんには従業員組合の結成や日本ジャーナリスト連盟の設立にさいして手伝ってもらいました。二人については「質問書」の（3）で話します。

読売争議に闘争委員として参加した人のほとんどが、大学や高等学校時代に左翼運動に関係していたようです。坂野善郎さん然り、志賀重義さん然り、長文連（ちょう・ふみつら）然りで、田中幸利、山主俊夫、菱山辰一、渡辺文太郎、岩村三千夫、渋川環樹さんも学生運動を経験していたのです。彼らは論説委員、部長、次長クラスで、編集局の要となっていました。

渡辺文太郎さんは労農派系のメンバーで、東京外語に在学中から山川均や荒畑寒村に私淑する形で活動していたと言っていましたね。事情があつて争議には参加しなかったけれども、小林雄一さんも九州帝大時代に社研の活動家だったので。

——政経部の次長だった宮本太郎さんも、水戸高等学校のときに共青の運動に関係して退学となっているようです。

増山 そうです。宮本君は中途採用組です。記者として下積みを重ね、実力があつたから頭角を現して、戦争末期に彼は九州総局長と

なっていました。戦争中、彼は読売の「花形記者」だったのですよ。

かつての左翼は優秀でした。大学や高等学校を中退となっても、彼らは元々実力がありましたから記事もうまく書き、機転も利く。読売は戦争中、売れる新聞を製作するためかつての左翼を利用したというか、協力を得て発行をつづけたわけですね。

私が面白いと思うのは、いや、正力社長や安田庄司さんなど経営幹部がさすがだと感心するのは、かつての左翼人士を承知のうえで採用し、経営に取り込み、かつ有効的に活用していることですよ。

——長島さんも同じようなことを言っていました。長島さんはかつて同盟通信社の政治部長でした。同僚で特信部長だった中村英一さんによれば、長島さんは、編集局長だった松本重治さんの智慧袋で、社長の古野伊之助さんからも絶大の信頼を得ていたそうです。調査しましたら長島又男さんは大山郁夫教授の高弟で、早大時代は左翼学生でした。長島さんご自身、戦時中の同盟通信社は「左翼の溜まり場になっていた」と言っていましたね。

増山 そうですよ。同盟通信社だけでないのです。新聞社では「朝日」にも「毎日」にも現在の「日経」の前身の「中外商業新報」にも、かつての左翼が職を得て活躍していました。左翼といっても使い道は多岐多様にあって、国家から異端として排除されていたわけではないのです。

満鉄調査部もそうだったと思いますね。私は2、3年前に石堂清倫さんから「元気かい、会おうよ」と連絡があり東京で会いました。彼も東京帝大の新人会のメンバーでした。石堂さん自身は、日本共産党の『無産者新聞』の発行など、左翼運動で追われて満鉄に逃げ込んだとい

うことです。彼は、満鉄における調査部員としての仕事を顧みて「満鉄の功罪」を最後の仕事として調べてみたい、と言っておりました。満鉄調査部や、満鉄の東亜経済調査局には特高刑事に追われて逃げ込んだ左翼がうじゃうじゃいたそうですよ（笑）。

事前に敗戦を知る

—— 増山さんは1945年8月15日の敗戦をどこで迎えましたか。

増山 第三陸軍病院で迎えました。私は敗戦まで5年間、主計として病院の予算作成や庶務を受け持ちました。

第三陸軍病院は、日中戦争が始まった1937年に設置された病院です。主に戦地や召集中に障害者となった兵士に対して義手・義足の装着や、社会復帰に向けた訓練を施す専門病院で、ベッドを3000近く有する日本で最大の病院でした。当初、私は東京から通っていたのですが、1944年5月に日本橋の自宅が空襲で焼失してしまい、疎開先の原町田（神奈川県町田市）からJR横浜線で相模原に通っていました。

余談ですが、当時の相模原市はまさしく軍都でした。市内に相模原造兵廠や陸軍士官学校、陸軍兵器学校、陸軍通信学校、陸軍相模原病院、さらには旧日本軍では最大の弾薬製造工場や弾薬庫などがあって、横浜線の朝夕の通勤時は軍人でごった返していましたね。

私は陸軍省や厚生省との事務連絡のため月に2、3回東京に出張していました。東京への出張といっても電車で1時間半の距離です。

敗戦は予想された事態でした。私は8月15日の昭和天皇の放送も、任地で冷静に聞きました。と言いますのは、連合国が日本政府に無条件降伏を通告していた事実や、政府が近々、これが8月14日だったわけですが、ポツダム宣言を受諾するという情報も私は陸軍省に出張したさ

い、また築地本願寺の本社に立ち寄ったさい吹田秀三さんや武藤三徳君から聞いて知っておりました。陸軍省内も8月に入ってとにかく慌しく、ピリピリした雰囲気でした。

——築地本願寺の本社とは何ですか。

増山 読売の本社は京橋区の銀座にありました。その本社が1945年の5月に空襲を受けて、復旧するまでの仮事務所を近くの築地本願寺に置いておりました。印刷その他は一時期、朝日新聞社の工場にお願いして新聞発行をつづけていたのです。

復社が遅れる

——召集が解除されて、読売に戻ったのはいつですか。

増山 読売の人事記録では私の復社は1945年9月1日になっています。実際は9月初旬、敗戦から3週間ほど経っていたと思う。

読売では9月13日に、政経部が中心となって編集局各部の部長や次長ら4、50名が正力社長に面会して、高橋雄豺主筆や中満義親編集局長の更迭を申し入れました。これが読売争議の発端です。私はその2、3日前に彼らが編集局内において経営幹部の戦争責任を追及する準備をしていたことを記憶しています。だから私は9月10日以前に復社し、記者として実質的に仕事をしていたと思いますね。

私の復社がやや遅れたのは、主計としての残務整理の仕事がどっと出てその処理に追われ、また突発の事件が起きたからです。

私は戦争が終わった翌日から目が回るほど忙しくなりました。東大医学部の外科や内科、千葉医専などから招集されていた教授や医師、看護婦が退職しましたので、私は毎日、徹夜状態で書類の作成などに追われました。また入院患者のなかには敗戦となってかってに退院したり、はては病院の倉庫に保管していた機材・器

具や備蓄していた食糧が盗まれるというような事件も起きて、病院の事務部門はてんやわんやの状態となっておりました。

——統制が利かなくなったのですか。

増山 いや、そういうことはない。病院は8月中はなお陸軍の統制下にあったから秩序は保たれていた。けれども病院は敗戦に伴う混乱で、患者の要求・要望に対してきめ細かく対応できなくなっていたので、多少の悶着は起きたのです。私は召集されて以来、5年間も同じ部署にいたものですから、実質的に責任者のような立場になっていて、事件や問題が起これば私に対応し、あるいは後始末をつけていました。

陸軍士官学校生の丹沢籠城事件を解決

増山 敗戦となって1週間ほどして、相模原の陸軍士官学校の生徒4、5人が丹沢の山中に立て籠もるといふ事件が起きました。復社が遅れたもう一つの理由は、私がこの事件の解決に動員されたからなんです。

この事件は通常の歴史書においては記録されていない。経過説明をしますと、マッカーサー将軍が乗った米軍の輸送機「バター号」がマニラを発って8月30日に厚木飛行場に到着し、占領統治を開始するという情報が第三陸軍病院に伝えられました。陸軍士官学校生らは、厚木飛行場に到着したマッカーサー将軍を襲撃するという決起し、丹沢の山中に立て籠もったのです。厚木飛行場は丹沢の麓にあってごく近い。

実はこの事件より先に、昭和天皇の「終戦の詔勅」が放送されて戦争が終わったわけですが、厚木飛行場に駐屯する部隊の一部の将兵が反乱し、徹底抗戦を主張して飛行場を占拠するという事件が起きました。この事件は陸・海軍が前面に出て、首謀者を力づくで拘束し鎮圧しました。

ところが厚木飛行場における「反乱事件」につづいて、こんどは陸軍士官学校の生徒が丹沢の山中に立て籠もる事件が起きたわけです。陸軍はこれを表沙汰にしたくなかったようでした。陸軍や士官学校の校長が表に立つ形ではなく、然るべき人に説得してもらおうということに決まって、私に役が回ってきました。陸軍関係者が病院に連れられ、病院長と相談して私が適任ということになったのです。

私は軍当局から直接「丹沢へ行って説得してくれ」と頼まれ、案内人を連れて、まずは状況を把握するというので彼らのところへ行きました。

籠城組は血気盛んで「日本は神国であり、絶対に米軍の占領を阻止する」とまくし立て、1回目は説得に失敗しました。2回目の説得は翌日中か、もしかしたら翌々日だったと記憶する。陸軍と病院側からは事前に、冷静にそして細心の注意をもって説得することが改めて指示され、また万が一の事態も想定されるため兵士を2班に分けて連れて行くことが決まりました。

私は「貴君らの心情はよく理解できる。けれども天皇陛下の聖断をもって戦争が終わったのであり、陸海軍の参謀本部も解除と撤収を命令している。もし貴君らが襲撃などを決行すれば、連合国に日本軍が戦争を続行しようとしているとか、戦争終結をめぐって国民が分裂している印象を与えてしまう。このさい堪えてくれないか」と言って必死に説得したのです。

——説得は成功したのですね。

増山 ええ。彼らは素直に山を降りました。丹沢に籠城した生徒が陸軍においてどう扱われたのか、私は承知しておりません。他方、説得に成功したということで、私は陸軍省や病院長から感謝の言葉をもらいました。

この事件に関しては私はこれまでどなたにも話していない。尋ねられることもなかった。こ

の種の話は自慢話として受けとられるでしょう。あるいは誤解される惧れもあります。

私は軍籍時代の5年間の恩給＝年金については文書をもって辞退を申請し、これが認められ、現在も受け取っていない。私自身、戦争と戦争時代に厳しく向き合っています。

このような意識が根底にあって、私自身語りたくなかったことも事実です。あなたからの「質問書」に読売への復社がなぜ遅れたのか、とありましたものですからつい話してしまいました。どうか聞き流してください。

復社する

増山 私が読売に復社して正力社長に挨拶に行きましたら、社長が「おお増山、俺は心配していたよ。無事で何よりだったな」と喜んでくれました。社長は、私が陸軍士官学校生の丹沢籠城事件で説得にあたったことを知っていました。新聞社だもの、事件に関する情報は得ていたのです。開口一番ねぎらいの言葉をかけられましたが、正力社長のそのへんの気配りがやはり並ではない。

——復社されて、すぐに記者活動を再開されたのですか。

増山 ええ。読売は太平洋戦争中に、経済部は政治部と合体して政経部となっていました。部長は中島徹三さんです。前任の安田庄司さんは太平洋戦争中、陸軍の顧問として砂田重政司政官（南方軍軍政顧問）に請われ、随員としてシンガポールに赴任した経緯がありました。それで、私が復社したときは戦犯として逮捕されることを懸念し、自ら「当分、自宅謹慎する」と決めて社に出ていなかった。

戦後、1945年9月に政経部は政治部と経済部に分けられ、12月にまた政経部となりました。この政経部の次長は、敗戦まで九州総局長だった宮本太郎君でした。宮本君は、次長といって

も微妙な立場にありました。

——「微妙な立場」とは？

増山 宮本君は戦争中、読売における「花形記者」だったのです。もう一人「読売の顔」になっていた人に四方田義茂という「皇軍報道」や戦局問題を受け持っていた論説委員がおりました。宮本君は社会部の記者で、戦争中は読売で一番活躍した記者でした。軍国美談の記事づくりは実にうまい。

——宮本太郎氏は著書『回想の読売争議——あるジャーナリストの人生』（新日本出版社、1994年）において、戦争中の記者活動について自己批判をなさっておりますね。

増山 そうかね。あの本は私も読みましたからね……。宮本君は戦争が終わって、古巣の社会部に復帰するさい、同僚から「あんなに戦争記事を書いた宮本が同じデスクに戻るなんて、そんなバカなことがあるか」と反対され、社会部は受け入れなかった。金沢支局長から政経部長として戻ってきた坂野さんが「宮本は俺のところでもらう」と言って、彼は救われたのです。坂野さんは人格者です。記者のみんなから尊敬されていました。その坂野さんからの申し出だったので、政経部の記者も反対できなかった。宮本君は戦後、確かに変わりましたね。読売争議では彼は率先して活躍しました。

農地改革の記事を書く

増山 私は政経部で主に農政を担当しました。戦争中から占領期にかけて農政記事におけるメイン・テーマは土地改革すなわち農地改革で、これは入社以来、私が扱っていたテーマでした。

手元に「読売」があれば、この記事は私が書いたとか、この記事のニュースソースはどことか申し上げることができたと思います。農地改革の記事はほかに専門記者がいなかったの

で、1945年9月中旬以降、46年の前半くらいまでは、社説を含め私が書いていると思います。

——社説も書いておられたのですか。

増山 いや、単独で書いてはいない。要するに社説の下書き的なものです。

少し説明します。社説の執筆は主筆や論説委員の仕事です。論説委員は政治、国際問題、経済、社会、教育・文化などの担当が決められていて、敗戦時には専任で7、8名、客員でも何人が在籍していました。

政経部といっても扱う範囲は広い。専門外のテーマや、問題が複雑なテーマもあります。そういう場合、論説委員は各部の部長を通じて、より専門知識や精通している記者に論点整理や、下書き的な執筆を頼むことがありました。農地改革に関する問題については、吹田秀三さんもおりましたが基本的に私に回ってきていて、箇条書きで論点を整理し、課題もあわせて提起しておりました。

これは余談です。読売の経済記事は戦争中から注目されていました。読売は正力さんが社長となって以来、社会部や文化、生活・娯楽記事が評判となっていました。戦争が終わって政経部の経済部門を拡充し、論説委員も増員となっておりました。

——論説委員にはどのような方がおられますか。

増山 坂野善郎さんが論説委員を兼ねておりました。ほかに菱山辰一、石浜知行、吹田秀三さんなどがおりました。石浜さんは九州帝大の教授だった労農派系の学者で、中国問題を兼ねていました。著書に『支那戦時経済論』（1940年）などの著書もあり、中国経済の専門家でした。清水幾太郎さんが1945年の暮くらいに論説委員を辞め、後任として論説委員の枠で具島兼三郎さんが就任しましたが、具島さんも経済担当でした。

——具島さんは、読売争議が終わったあと民報社に移り、1948年に九州大の教授となっていますね。

増山 そうです。具島さんもかつては満鉄の調査部員でした。読売ではもっぱら中国問題に関する論説や記事を書いていました。

農地改革については戦争中、1943年4月に東条内閣のもとで自作農創設という形で骨格ができていました。GHQは戦後、財閥とともに寄生大地主制が日本軍国主義の土台となっていたという認識で、地主制を解体する改革を日本政府に最優先課題として指示しておりました。

問題はどのような方法、条件で農地改革を実行するかにありました。自作農の創設にあたって、政府が小作地の買取や売渡しをおこなう強制譲渡の方式が基本となっていて、在村地主や不在地主の確定、譲渡の期間、買入と売却の価格、支払方法、所有権の移転、在村地主の農地保有程度、農地委員会の構成など、問題は多岐に及び、地主・小作の利害対立が先鋭化していました。

だから、私は記事を書くといってもきちんと勉強してからでないし実際に書けなかった。私はそこで農林省の農政局の課長だった井上晴丸さんのところに通って教えを乞い、連絡を取りながら書いたのです。

——井上晴丸さんはマルクス主義の農政学者としても著名ですね。

増山 そうです。井上さんは官僚でしたが、非常に進歩的で、農林省職員組合の結成をリードし、民科の経済部会を立ち上げています。井上さんは農林省のレッドパージで首を切られ、

のち立命館大学に職をえましたが、私は井上さんが亡くなるまで交遊がありました。

当時、農林省の農政局長は和田博雄さんでした。井上さんは和田さんのもとで課長を務めておりました。局長の和田さんも進歩的な官僚で、第1次吉田茂内閣では農林大臣に就任しています。和田さんは、農地改革においては農林省や政府の方針策定をリードするわけですが、井上さんの農地改革論は、和田さんよりも急進的だったと思いますね。

井上さんが私に語ったことで記憶に残っていることを紹介したい。それは地主制の解体とともに、農地改革は長期の事業として取り組み、国が、自作農が自立し農業経営が安定するまで面倒を見なければならない、ということです。井上さんは農業・農家の協同組合化とともに「地主がいったん小作地を手放しても、自作農となった農民が経営に失敗すれば、また地主が農地を買い戻してしまうのではないか。だから自作農に対しては、農政や税制でこれをケアしなければならぬ」と熱っぽく言っておりました。

——実際、そのような施策がとられていませんね。

増山 ええ。農地改革は成功したと見てよいでしょう。農地改革が成功した結果、大正時代以来、日本の社会運動を牽引してきた農民運動は潮を引くように衰退していきました。解放された小作農は、こんどは自作農として歴代の自民党内閣に庇護され、自民党に取り込まれてしまった。

(つづく)